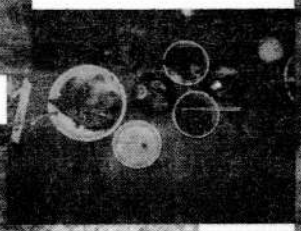
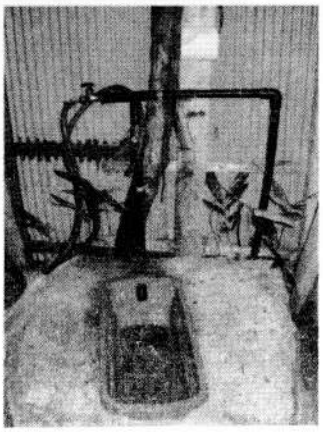
目で見るベルクハイム

——植生、食生、食のその後を探る——

11期　加藤忠好





ベルクハイムに
水洗トイレ!?
昔は、ぼっとんに
カマドウマ。
トイレに行くのが恐怖だった…。

どんなに遠くにいても

キミのことば

聞こえているよ。

おちさん
越智山(福井県)

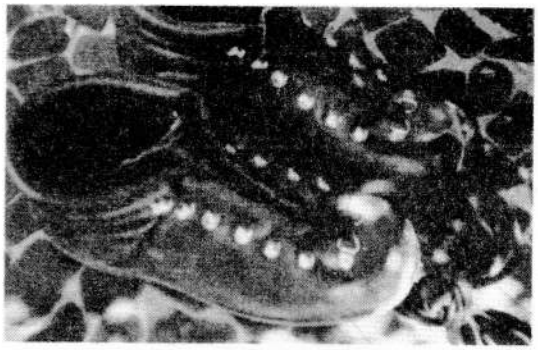
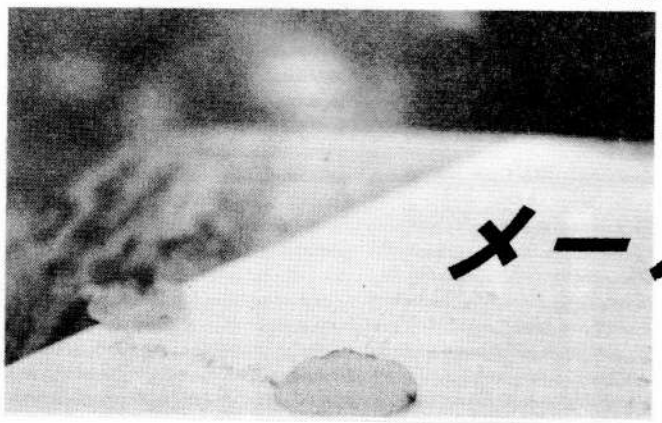


photo 21期 大野直子



メール宅急便
「寄稿」

東京マラソンを走るの記！

6期　合津　尚

2007年2月18日は夜間から風雨が強くなり、マラソンには最悪のコンデションになった。都庁前の広場に集合した3万人のクレージーな集団は、それにもかかわらず雨に打たれながら寒さの中で、裸同然のスタイルで約1時間近くもスタートの号砲を待ち続けた。これにはそう簡単には引き下がれない背景があった。

そう、昨年の8月に申込書を発送、10 月の抽選で3倍近い倍率を潜り抜け1万円の参加費を払い、その後の各人の特訓を経てこの記念すべき第一回大会の場に立っているのだから。

どうしてこうも最近は走ることがブームなのか、単なるメタボとかの対策でこんな苦労をする必要がないと思うが。理屈はともかく山と同じで、そこに42KMが横たわっているからか、これを走れる能力を自分と外部に誇示できるからかもしれない。

山にもそれなりの装備と経験・登り方などのノウハウが必要だが、マラソンも同様でシューズ・服装の選択とか食事・トイレの問題や走り方などのノウハウがある。

長時間走る場合に発生するトラブルとして、摩擦による足のマメ・股や腋の下の皮膚の破損や空腹・脱水症状からトイレの問題は深刻だ。それから最悪なのは体内に疲労物質が徐々に蓄積して、35KM あたりから体が動かないとか筋肉が痙攣するとかの極限状態となる。こうした障害(これをカベという)を乗りきるにはひたすら日頃走り込む(月に200から300KMぐらい)ことと、ペース配分で疲労の蓄積を防止すること。

さて前置きはこれくらいにして、どんな風に走つたか？

先ず長蛇の列のトイレをクリアーして、荷物を早々に預けたので直前のオニギリを食すことが出来ず、ランニングとハンツの裸同然で雨中で待つこと 50 分の苦行。走るペースはキロ5分 30 秒見当で4時間を目標として走りだした。なにしろ3万人が川の流れのように動き出したが、速度に差があり思うように動けず、やっと神田あたりでペースに乗った。それから日比谷を過ぎて品川までは追い風だが長かった。やっと品川駅から折返しになったが、ここからが雨風をまともに正面に受けるアゲンスト状態で体力の消耗が徐々に進行する。日比谷から普段は歩けない銀座通りに出て中間点で、フルの半分のハーフで1時間 55 分といつもより少し遅いペースだがまずまず。

この辺から雨の中だが大変な観衆の声援、中央通りから日本橋を過ぎて浅草・雷門から折返して、再び銀座から築地をすぎていよいよ 35KM あたり。辛いことにちょうど佃大橋の上り坂が延々と続き、ついにガス欠状態になってしまった。キロ当り2分近いロスが5キロ以上続きこれが致命傷になった。残り2キロでバナナと水を補給したが時すでに遅し。4時間 10 分で 19,500 人の男子中 7,600 番で終了した。

これから1ケ月後の荒川マラソンという1万人以上集まる大会があって、ここでは4時間を切って、なんとなく幸せな気分で日々を過ごしているビョーキの年寄りでした。

ネパール展始末記

15期　舟田　節子

「エベレスト見に行くモン！」の出版と、「ネパール大好き仲間展」開催の予告をワンゲル会報に出したのは丁度一年前のこと…というより、この予告のために、開催期日や内容が一挙に決まり、企画はスタートとなりました。

本を出版するに至った経緯は後回しにして、出版したら売らねばなりません。売らねばというよりまず世間（少なくとも金沢、石川県）にアピールしなければなりません。どうやって？の時に、塾の予習として開いた新・中３英語教科書の見開きカラーページが、丁度ネパール特集でした。従来国際援助活動紹介といえばアフリカが相場でしたが、今、時代の目はより身近なアジアに向き始めています。そして、金沢スタンダードという教育特区施策は、英語指導の半年前倒しをスローガンとしていますが、教科書改訂時はに前倒し供用ができないため、かえって半年遅れて、新版教科はこの秋配布されたばかりでした。これは千載一遇のチャンス！

というのは、会計を任された石川ネパール協会というのが、（それも、会長は高校の英語科恩師、事務局長が高校の同級生というご縁で断れなかった話）とんと活動をしておらず、年会費もろくに入ってこないという状況にありました。何かを企画して、その連絡で年会費のことも思い出して頂くとしないと、存続は風前のともし火です。そもそも会というのは会費集金のためでなく、何かやりたいことがあって発足した筈なのに、何か（規約によれば、ネパールとの親睦・交流を推進し紹介していく）をやりたかった発起人達は誰も出てこないという、これまた不思議な会でした。不審がりながらも、半端な責任感と義侠心でずるずる穴埋めをやっているうち（どうも私のビョーキ）、お鉢が回ってきて「何かをやらねば…」に至っているのでした。

塾業のおかげでメディアミックスという手法は身についてしまっていました。宣伝活動とは相乗効果なのです。各種メディアを同時に使い、個々と全体の双方で動いてやっと効果が出てきます。せっかく時間を使うのであれば、「出版」と「ネパール協会」と「ワンゲルＯＢ」と、全部からめてしまう（＝面倒をかける？）という「壮大な」企画書が、ここに産声をあげたのです。

◆出版という自己実現

動機は後回しにして、応募してみたのは、いわゆる「あなたの原稿を募集します」という、出版社の小遣い稼ぎ企画です。かたや活字離れと出版不況、かたや「私だって」の自己実現願望…ここに自費出版をもう少しリボン装飾したような小規模出版ビジネスが出現することになります。

そうとわかってはいましたが、私を動かしたのは、原稿をかなり読み込んだとわかる感想文（その気にさせるプロですから当然）がついていたのと、「編集者がつきプロとして、原石を書店に並ぶまでの宝石に磨き上げる」「全国の

提携書店に必ず並ぶ。当社の流通ルートに載せる」（自費出版は、書店へ個人で頼みに行かなければならず流通ルートがありません）の提示条件でした。もっと文章修業をして、これぞの自信作（いつ？）ができてからよりは、今回を授業料とした方が、一番の勉強になる！と考えました。（走ってから考える人！）

今後こんな自己実現をされたい方のために、金額をご披露しましょう。全体ページ数、カラーページ数、写真・図版数などで当然変わってくる数字ですが、より簡易出版をめざす部門が独立したばかりのキャンペーン中で、経験者からは「安い方」と言われた数字です。 500部印刷、55書店に配布で 112万円。 800部印刷、 300書店に配布で 230万円。原版制作料は一緒なのですから、書店配布にどれだけとられるものかということです。無名作家が電撃デビューなど宝籤なみの話で、素人本は場所塞ぎをやっているだけ…だから場所代をとられるのです。さらに終盤には、「当社は流通ルートに載せるまで。書店のどこに置くか、いつまで店頭に実際置くのかは、あくまで書店側の裁量です」と通告されました…（やっぱりね）。それも、先に知ってよかった勉強です。印税など涙のような金額。そして１年の契約が過ぎれば回収され、無料で返本されてきます。つまり経費は場所代や手数料がメインになるのです。

私が契約したのは 500部。そして、３月１日発行日の前に、全国書店配布分を除き完配できてしまいました。配ったのと、売れたのが半分ずつ…。知人社長から 100部注文などが入ったお陰です。ここらで満足が分相応の青い鳥とわきまえて、増刷（自費増刷を意味します）を断りました。

今私の手元にも１冊しか残っていません。もし来年、全国書店配布分が返本されてきたなら、残りの知人に配り、さらに残れば図書館に寄贈して、夢の終了とするつもりでいます。

◆ネパール展

「石川ネパール協会」とは任意団体です。年度末には、団体規約、役員名簿、今年度活動記録と決算、来年度活動予定と予算を届け出ます。すると次年度、行政からの名義後援を受けたり、助成金を申請・受給できる団体となります。ＮＰＯより格段に書類は少なく公開義務もありませんが、助成金額も少ないのです。ちなみに金沢市の場合、総額で90万円（漸減の予定）。１団体で10万円まででかつ、総支出の半額までが助成限度。連続受給もできません。そのうえ全体調整のため、年度末まで実際助成されるかはわかりません。これが県になると、草の根国際活動支援助成金の名となり、40万円を越える事業であることが加わります。ともに、助成項目と按分も定まっています。

つまり、任意団体の活動とは「時間も経費もボランティア」が大前提にあります。「公益性があるのなら、半額程度は援助してあげましょう」が助成金の立場です。より公益性がある活動に、より広く支援するために、年度末まで、当該事業が助成対象になるか否か、その額も決定できません…となるのです。

一方名義後援の方は、とるのはタダですが、それぞれへの申請が必要です。引継ぎは残金だけ。様式書類があるとの申し送りも受けてはいませんでした。「どうすればいいんですか」「教えて下さい」「どうしたら通るんですか」を窓口で繰り返しました。クレームもヒントも小出し…民間サービス業には考えられない意地悪さと、非能率に耐えました。日参を重ねて、まずネパール大使館からの名義後援をとること。そうすれば日本のお役所はすべて国際交流の見地から応援すべきとなって、ぞろぞろ後援する側に回ることがわかりました。そうやってネパール大使館、（財）石川県国際交流協会、金沢国際交流財団、金沢市教育委員会、石川県、金沢市、北国新聞社、テレビ金沢、エフエム石川、企業ではアルパインツアーサービス㈱、学習

北國新聞　2007年（平成19年）3月11日（日曜日）

「ネパールについて知ろう」

石川の協会13日から企画展

並木町の子ども招待

民族衣装や民族楽器などの展示品を準備する石川ネパール協会の会員＝金沢市尾張町

石川ネパール協会は十三日からネパールの歴史や風土を紹介する初の企画展（本社後援）を開催する。十日までに「雪男の毛皮」のレプリカをはじめ、絵画や陶芸作品など約百点が県内各地の協会員から集まった。

企画展は金沢市並木町の浅の川画廊で「集まろう、そしてネパールについて知ろう」をテーマに開かれる。展示品は、協会員がネパールを訪問した旅で購入した品々でこれまで一堂に公開されることはなかった。会員が感動した風景を撮影した写真や民族楽器なども並べられる。

初日は地元並木町の子ども会を招き、同協会会員がパネル展示でネパールの自然や歴史について説明するほか、島崎四郎副会長が学校建設などの支援活動などについて講演する。

かな　2007年（平成19年）3月14日（水曜日）

「雪男の毛皮」レプリカなど展示

石川ネパール協会

石川ネパール協会の初の企画展「集まろうそしてネパールについて知ろう」（本社後援）は十三日、金沢市並木町の浅の川画廊で始まり、現地で伝わる「雪男の毛皮」のレプリカや民族楽器、ネパールの山々を撮影した写真などが来場者の関心を集めた。

同協会の会員がネパールの旅で集めた約百点が展示された。民族衣装を着た操り人形などの民芸品や仏画の曼荼羅（まんだら）などが並び、ネパールの文化を伝えている。

初日は地元並木町の児童十五人が招待され、協会員からネパールの自然や歴史についての説明を受けた。材木町小四年の吉田能英留君は「ネパールの山々は富士山より高い山ばかりで驚いた。ネパールに行ってみたくなった」と話した。展示は十八日まで。

ネパールの民族衣装や写真を眺める児童＝金沢市並木町の浅の川画廊

研究社㈱を後援として、ネパール展（Let's Get Together and Learn about Nepal）はゴーとなりました。

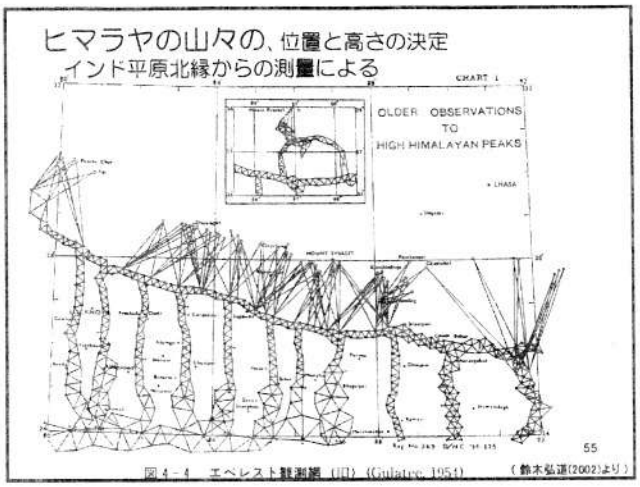
そのように最初は名義後援獲得だけに動いていました。ところが具体化するにつれ、出費が嵩むことが分かり、さらには助成金を頂く活動をしていなければ、行政の言う「活動」に該当しないこと、助成金申請と獲得の前例を重ねていかないと将来の活動が不利になることも分かってきました（この歳にして社会構造を知った…）。金沢市からの助成は、駆け込むような写真展企画で前年受給しており、使えるのは県の助成枠のみ。４０万円事業を考えなくてはならなくなりました…。またしても泥沼に填まった感覚…。しかも 100%算定とされる項目で金額を上げないと助成対象金額は上がりません。大きいのは講師謝礼、講師旅費の項目です。もとより帰省ついでにと長岡先輩にお願いしてあり、また、スケッチ展示をお願いしたトレッキング仲間にも、説明会を強要してしまいました。画廊の設営や、額縁貸し出しも義兄にボランティアをさせて…。ようするに、人脈、いかにホワイトリストを持っているか…にかかります。そしていっぱい借りを作ることにもなりました。今はそんなに頼める人がいたご縁と、協力に感謝でいっぱいです。

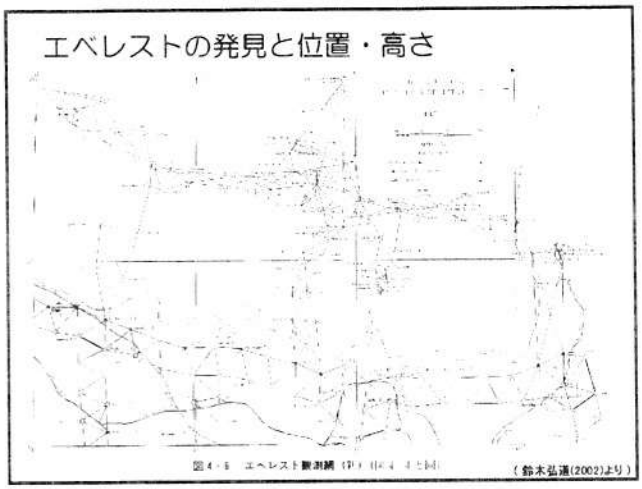
◆ワンゲル万歳！

特にワンゲルＯＢ関係者は協力が際立っていました。発案段階の、形になるかもわからない時に、即「いつまでにですか？」の答えや、ろくな説明もないのに「協力します」が返ってきたことには、今も感動を覚えます。

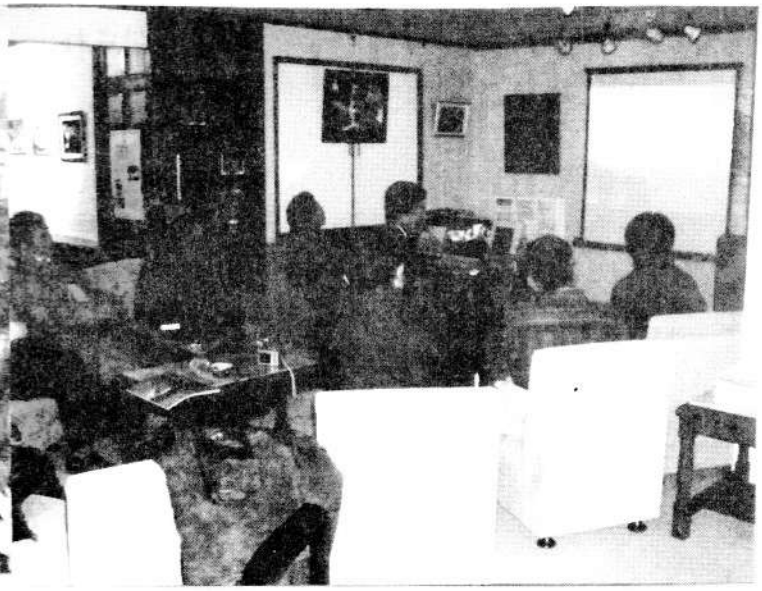
ワンゲル外の反応が悪すぎました…しかし、それが普通です。テント内で誰かが動いた時に、鍋をこぼすまいの手が何本も伸びる…そんなワンゲルの方が特別だと思います。とても安易

《長岡様講演スライド８０枚中の２枚》





《11期長岡正利様の講演》



《29期深井嘉浩様のトレッキング説明会》

にワンゲルＯＢまでからめてしまったのに…。

11期長岡正利様　３月17日（土）に、「ネパールヒマラヤの地図と山の高さ」をご講演頂きました。

・基礎知識：地図（地形図）の出来るまで
・各種地図とその利用
・山の高さ（標高）とは
・ヒマラヤの測量と地図、その山々の高さ
・立体視の愉しみ：地形や写真の立体視

また、関連文献や写真集も展示ご協力頂きました。観光ブームに湧く以前のネパールの物もあり、特に毎日グラフの「マナスル登頂記念号」は、熟年世代に好評でした。戦後日本が凝縮しているような報道誌でした。

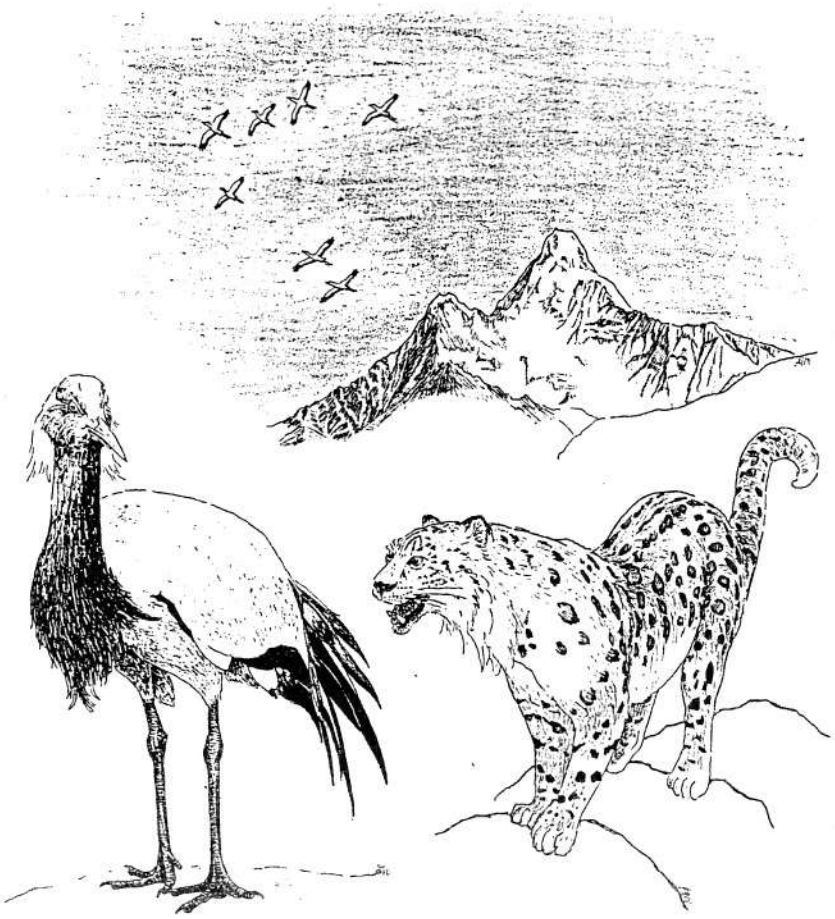
29期深井嘉浩様　春の説明会を利用したとはいえ、３月16日（金）と17日（土）に計６回もトレッキング説明会をして頂きました。勧誘用ならではの素晴らしい映像。いつものシチュエーションとは違ったことで、どなたかの夢につながったことと思います。皆様もどうぞお引き立て下さい。アドバイスはもとより、無理も聞いてもらえますので。

またネパールのＤＶＤもご提供頂きました。

20期中村元風様　連絡をすればさえ無理難題付きの先輩の私。プロだからと遠慮しているつもりで、ダメ元で迫ってしまう…。恐縮しているようで、反省なし。今回も快く出品をご承諾頂きました。ふるさと百名山の名前を変えれば既製で間に合うくらいで軽くお願いしたのに、

新作をご用意頂きました。ヒマラヤの空、岩、僧衣の色が、ふくら手の白網目の中に点在している花器です。その直前の東京での個展では好評の作品になったとのことで、安堵。無理難題をも創造につなげる姿勢にプロを感じました。（しかし展示責任までを深く考えていなかったので、会期中は結構ハラハラ）　会場にも奥様とお越し頂き、ありがとうございました。

21期竹中敏様　その前の本のイラストの時にもちょっとした思惑違いがあり、迷惑をかけてしまいました。ただもう謝るしかない私に「僕は頼まれると嬉しいんです」。スゴイ！そう言えるようになりたい！どれだけ時間のかかるイラストか…でも、性懲りもなくお願いして、皆さんにも見てもらいたいと思いました。描いてくれたのはアネハヅルとユキヒョウ。添付されたコメントを紹介しておきます。



・アネハヅル

世界最小のツルの一種で、北海道のタンチョウヅルの翼開長２ｍ以上に対して、このツルは成鳥になっても約46cm程度です。

繁殖期の春から秋にかけては、シベリアからロシア、中央アジアを経てモンゴルに達する広い地域に分布し、日本でもまれに観察されています。秋になると、チベット側からヒマラヤを越えて暖かいインドに渡ることで有名です。

ヒマラヤを越えるということは、8000m以上の高空を渡るということであり、アネハヅルはほぼ対流圏と成層圏との境目を飛行することになります。ヒマラヤの頂きは、常時氷点下20度以下、時には氷点下40度にもなり、風速50mの強風が吹き荒れる世界です。

アネハヅルの祖先たちは、ヒマラヤがまだ低かった時代からこの渡りの旅をしてきました。そしてインド半島に押されてヒマラヤがゆっくりと隆起し続け、標高8000m以上になった現在も、太古からそうしてきたように、ヒマラヤを越える旅を続けています。

ヒマラヤを越えるアネハヅルの群れには、羽を痛めたもの、子育て中のもの、春に生まれたばかりの幼鳥もいるのです。２kgあまりの小さいツルが、もっとちっちゃい幼鳥と共に、ヒマラヤを越えていく光景を思うと、「がんばれよ」と言いたくなります。

ユキヒョウ

中央アジアからチベット、ネパール、アフガニスタン、カシミール、ヒマラヤ山脈などの高原や山岳地帯に生息するネコ科の動物。標高2000～6000mの高地で過ごし、目撃例は数えるくらいと言われる伝説的な大型捕食動物です。獲物となるのは、アイベックス、アオヒツジ、ヒマラヤジャコウジカ、イノシシ、ウサギ、鳥類、時には家畜を襲うこともあり、自分より大きな動物を倒すこともあるそうです。

今なお、その美しい毛皮や漢方薬に利用するための密漁が絶えず、一時は1000頭にまで減少し、現在は絶滅危惧種として保護に力が注がれています。

最近はボランティアによる「ネパールのユキヒョウ」プロジェクト等の活動によって、その生態が解明されつつあります。

今、私たちがここに居るこの同じ時間に、ネパールの雪山のどこかに、獲物をねらっているユキヒョウが息をひそめていると思うと、胸が熱くなります。

15期奥名正啓様　同期のよしみで、私の空いている時間に合わせて（相当に我儘なことだと後で気付いた）来てもらい、プロジェクターと、パソコンをつないでもらいました。パソコンも１週間借り出しです。基本的なつなぎ方も、それがどう相性が悪いのかもわからないんだから…持ち帰ってもらい、調整してもらって、「他は触るな」で操作を伝授してもらいました。やはり、動画の時代。変化に富んだ展示構成とすることが出来ました。発案しても内部のフォロースタッフはゼロでしたから、そんな状況をカバーしてもらって感謝です。

15期上馬敏栄様　油絵２点と、ネパール民芸品（操り人形、ランタン、刺繍製品など）を展示ご協力いただきました。大量のパンの差し入れも、ありがとうございました。感動した景色を、描いてまた楽しむ…素敵です。将来ご主人との写真と油絵の二人展も、期待しています。

倉谷でお世話になっている山下様　「雪男の頭の皮」なるもののレプリカを用意しようと思いつきました。子供には受けるはずです。ゴワッとした素材。たしか「クマの毛皮ならいくらでもあげる」と、おっしゃっていたので、これも安易に頼んでしまいました。実は原皮は捨てるほどでも、なめせば大枚かかるそうでした。知らぬが仏でそれを頂いてしまい、いくらなんでも完全品に鋏をいれることは能わず。おまけのアナグマの方を、縫い合わせ、カラーリングして人形ケースに収めました。現地の風習と同じように置いた寄進箱には芳志が集まり、教育支援口座に収めました。

《ケース内が雪男の頭の皮レプリカ
実物（ようするに偽物）に、かなり近い》

◆総括

Ｂ２ポスターは50枚、Ａ４ポスターは 400枚案内はがきは2000枚を配布。名義後援をとったことで、教育委員会のメイルボックスが使えるようになり、市内小中学校、公民館宛てに一斉配布をすることも出来ました。

北国新聞には事前取材を含め、４度記事にしてもらいました。テレビ金沢、ケーブルテレビ、ＮＨＫテレビの３社に取材してもらいました（取材依頼をだし、電話でも確認した）。

ネパールティーを来場者全員にサービス。ダルバート（ネパール定食の豆スープ掛けご飯）は、知人に提供用として連日仕込み、ネパールのお香が漂い、ネパール音楽が流れる中で、召し上がって頂きました。

会期中約８００名にご入場を頂きましたが、ワンゲル関係では３期田村様、４期佐藤様、７期村田様、８期野村様、山村様、11期加藤様ご夫妻、13期辰野様ご夫妻、吉田様ご夫妻、15期上馬様ご夫妻、松林様、20期中村様ご夫妻にご観覧頂き、ご拝聴も頂きました。（漏れていたら、ゴメンナサイ）　そして助成金も申請通りに獲得し、活動実績を残すことが出来ました。

自分に何ができるか？のように始まり、あらゆるツテを使う…でチャレンジしたこの企画。こぼすに尽きない裏話も数々ながら、いかに自分が人とご縁に恵まれているかを知る機会になりました。

本を上梓したことを含め、期せずして人生55年を総括できたような平成18年度でした。この後披露するゴタゴタ話がなければ、本を出すことも、ネパール展を企画することもなかった…マイナスエネルギーをプラスエネルギーに変換せねばとした自分に拍手。そうさせてくれた人とご縁に、ただただ感謝です。

◆おまけのゴタゴタ話

「後回し」のフレーズを２回も使ってのゴタゴタ話…。これを出だしから書いたら「ワンゲルの皆さんのご協力に感謝」の趣旨がぼやけてしまいます。また、かつて「山の語り部特集」で紹介した責任から、その後を簡単に伝えておきたいと思います。

ようするに、私が25年所属してきた某山岳会は分裂しました。それは世間によくある話、また、外部から見れば単なる確執の、聞くに堪えない話です。老害…権威にしがみつくボスが、一番奉仕し、実力・人望ともある二番手を追い出しにかかり、それを庇った者を次々粛正。「会議メンバーから外す」「本の改訂時には名前を外す」「登山教室の助手から外す」「原画展は没にする」などなど。そう脅せば相手が折れてくると考えたようです。

あげく自分が退会して、新会を設立しました。新会登録とはボス個人への誓約書のようなもので、かつて改名の度そんな禊が行なわれたと今回聞きました。結果は、不信任投票がなされたようになりました。これまでトロイカのようにやってきた老分達、『40周年誌』編集の委員全員、親子白山登山引率リーダー全員、分県登山ガイド執筆者の５分の３（執筆率70％）といった、会の活動の中心者達が拒否。この事態収拾のために召集された緊急総会には、ボスだけが欠席し、誹謗文書を乱発。うやむや新会登録した側と登録しなかった側双方が、匙を投げたまま、それぞれに山を続けています。

本人が退会しても外部への窓口は元ボスです。紛らわしい会名にし、「会の仕事をあいつらが嫌がった為に分裂したのだ」と言い触らし、替わりはいくらでもいるとばかりに頑張っています。

既に提出してあった新聞掲載用原稿３本を罵倒言付きで返された所で、私はご縁を切りました。そして出版社の原稿募集に、手元にあったネパール紀行を送ってみたのです。上梓を地元新聞に載せ、地元のうつのみや・リブロ・紀伊国屋書店の店頭にも本を並べて、私なりの「清算」（？）を済ませました。

《７期村田様と11期加藤様ご夫妻》
《近畿ＯＢ会からの花束も、ありがとうございました》

もう過去のことになりました。私は筋を通した仲間達（成り行き上は、元の会名のままです。退会宣言文書を出したのはむこうですし、また、愛着あるであろう熟年会員達のために触らないことにしました）と山を愉しみ、ようやく金沢から出るようになったバス会社主催の百名山ツアーにも便乗しています。これまで、仕事と家庭を両立しての山は日帰り圏が主でしたし、それ以上に執筆調査と称して地元の山に長年縛られていました。

執筆で名が売れたのか？ガイド本著者などは、お金と時間の持ち出しの方が多い名誉職のようなものです。誠意を傾けた仕事を「逆らった。だから切る」で出てくるのであれば、恩も帳消し。せめて老いを憎んで人を憎まず。それぞれが自分の納得できる人生を生き、関わらないとすればよいのです。

「人はなぜ山に登るのか？どう山と関わり続けるのか？」

『エベレスト見にいくモン！』のトレッキングの時も、その答えを参加者達に求めていたように思います。

山は山であり続け、人はそこに勝手に喜怒哀楽を重ねます。

徐々にそれらは思い出となります。最後は思い出を肴に山仲間と飲んで、地上に受けた生命とご縁に感謝するのでしょう。「仲間がいるから山に登るのだ。仲間と生涯愉しみ、万物に感謝するために山と関わるのだ」が、私にはより見えてきた答えです。

そんな中で、ワンゲル仲間はやはり格別なのです！

田村大兄 雑感あれこれ

3期 田村 昭夫

田村さんは今でも、ノーベル賞に論文を送られているのだとか…。その飽くなき野望に乾杯！

公共学校に宗教教育を

田村 昭夫

「神心獣体」を目標とする青少年の教育をすべし。脳は精神の中枢ではなく内臓の奉仕器官に過ぎない。脳に一番似合はないのが知識教育である。脳に最も合うのが獣の様な体を作る教育である。そして神の様な心を持たせるには宗教教育しかない。脳の本来の役割は本能の維持調節機能である。これは人間であろうが獣であろうが虫や魚であろうが動物に共通するものである。人間は脳を間違って使用している最も劣等な生き物である。この世で万死に値する罪人が生存を許されるとしたら、宗教教育によって洗脳するしかない。神の奥義を知り、聖人達の生き方を学ぶことである。これを教育出来ない学校は廃校にすべし。

ドイツの高等学校「Gymnasium」は健康な体を作ることを第一目的とする。獣のような強い体を作り、その上に神の存在と神の心を知らせるのが教育の目的である。

「神心獣体」（後藤新平の書）

「健全な精神は健全な肉体に宿る」
（ギリシャの格言）

「脳は内臓の働きの支援器官に過ぎない。
知識や思考の為の器官にあらず」
（金大医学部名誉教授小林宣泰先生）

小林宣泰氏はKU卒業 三期卒

強きを助け、弱きを挫け

田村 昭夫

弱者を助けると弱者は図にのる。強者は滅ぼせないから強者なのだ。自然の摂理は強者に有利に弱者に不利に働く。弱者を助けることは自然の理に反することである。しかし弱者をいじめてはならぬ。弱者を勇気付けるのが強者の務めである。弱者自身はイジメられ強くなるべし、イジメられて自殺していたのではいくら生命があっても足りなかろう。社会人として生きると云うことはイジメられ強くなることに他ならない。動物は強い種を残すために雄は雌の獲得にシノギを削る。

人間は弱者でも種を残せるものだから、だんだんひ弱になってゆく。特にこの国はくたばり損いの老人ばかりとなり、働かない年金生活者達が国を滅ぼしつつある。医療施設機関は子供や青壮年の為に存在する筈なのに、くたばり損いの不労所得者層に食い物にされている。生産者人口は減る一方で、青少年には未来への展望はない。七十歳以上の医療機関の利用を禁止すべきである。代わりに安楽死を推奨すべし。生活保護や年金制度は廃止すべし。　老人達は若者達に寄生してはならない。自立せよ！

後世へのお返し

田村 昭夫

戦後六十二年我国は完全に滅亡した。社会組織は老朽化して、その機能が果たせなくなっているばかりか、組織そのものが害悪である。全ての組織を破壊して0からやり直してみてはどうか。「見直す」のではなく「壊す」のである。再生は既存の否定から起こる。戦中戦後を生きてきた私達が子孫代々に残すものは何もない。新しい芽を出しやすい様に六十二年前の日本の姿にもどして後世にお返しするのが我々の勤めである。車のない道路に戻して、人間の歩く本来の道にする。役人や政治屋を追放する。駐車場を畑にする。寝たきり老人を安楽死させる。殖えすぎた学校をつぶす。年金制度も廃止する。

新しい制度として大統領制を作る。農業立国として食料を自給出来る国とする。天皇制と大統領制は両立せぬと云う論は間違いである。天皇は象徴であるから首都は京都に返還するのが正しい。

大統領は強い権力をもつから独裁にならぬ為に有能な補佐官が必要となろう。

一国の最高指導者たる者の資格は「民の声」より「天の声」を聞き、死を恐れないことである。

「民の声」を聞くのは役人の仕事である。私は大統領に立候補する。志ある人は立候補せよ。

■2008年GW後半 5月3日～6日、3泊4日

11期・青柳健二

妙高・火打連峰スキーツアー

【スケジュール】

●5月3日（快晴）

８：３０　笹ヶ峰 1320 m出発　シールで涸沢から三田原山中腹を登る

１５：２０　大倉乗越からスキー滑走し黒沢池ヒュッテ 2020 m着

●5月4日（快晴）

8：２０　黒沢池ヒュッテ発　茶臼山を越え、シールにて火打山へ

１１：２０　火打山 2461 m登頂　360 度の絶景を眺め昼食

１２：００　火打山南東の大斜面をスキー滑降アッという間に高谷池東部 2000m 付近まで滑り降りる

１３：３０　再びシールを付け黒沢岳 2212 m登頂

１３：４５　黒沢池ヒュッテに向けスキー滑降

１４：０５　大滑降後、平地部を滑って歩き黒沢池ヒュッテ着

●5月5日（曇り後雨）

８：２０　黒沢池ヒュッテ発　霧で視界がない中を三田原山に向け登る

１０：４０　三田原山 2360 m登頂　目の前に妙高山の頂きがそびえる

１１：２０　昼食後、霧が巻くなかをスキー滑降

１１：５０　林間滑降と沢で開けた斜面を滑り降りると、目の前にヒュッテがあった

１２：３０　チョット物足りなく、ヒュッテ裏の大倉乗越 2140 mにスキーを担いで登る、一滑りで黒沢池ヒュッテ着

●5月6日（快晴）

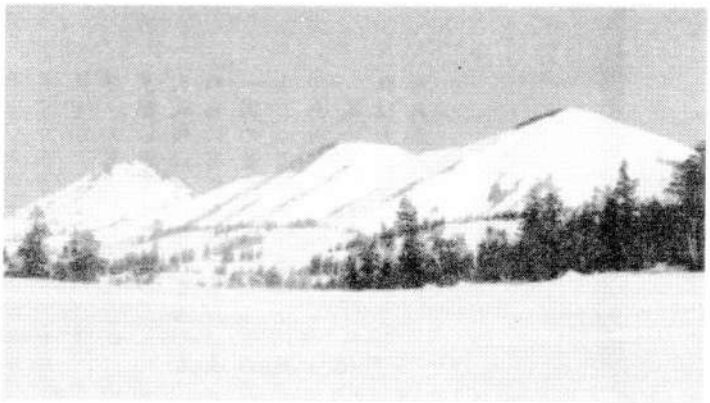
７：３０　ヒュッテ前で記念写真を撮った後、スキーを付けて帰途につく。黒沢をトラバースして三田原山中腹の林の中を滑り降りる

最後は登ってきた涸沢を、途中の３つの滝を避けながら滑り降り

９：４０　笹ヶ峰着、面白かった大満足のスキーツアーを終える

ブナ林の中を、シールを付けて登った

ドーム型の黒沢池ヒュッテと黒沢岳の朝



火打山は、山スキーのためにあるような山だ

ここ数年、５月の連休は、日帰りで山スキー（栂池、八方、立山、乗鞍等）を楽しんでいたが、自己流に満足できず、本格的な山スキーツアーを体験すべくガイド付き山スキーツアーに応募したのだ。

そのツアーは、日本アルペンスキー学校による妙高・火打連峰スキーツアー。私が大学時代のスキーブームを先導した、伝説の冒険スキーヤー植木毅氏が主催し、自らガイドを行っているツアーである。

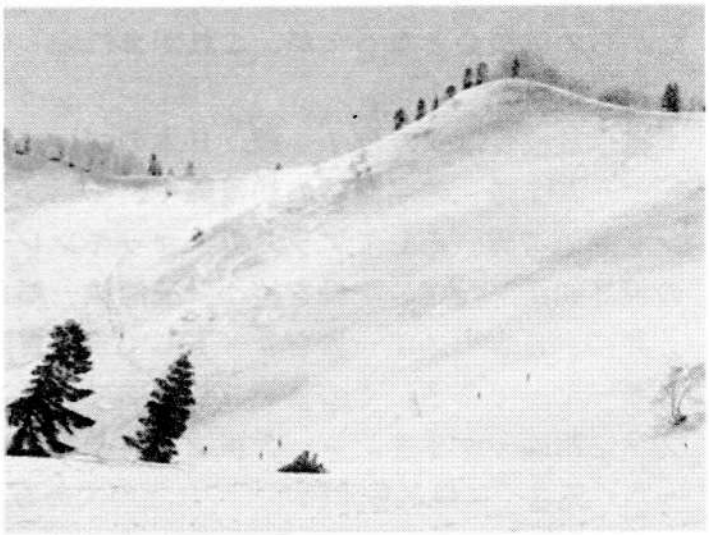
参加メンバーは、兵庫県の山スキークラブ「どんぐり」奥田リーダー他４名と私、他に同志社高校山岳部生６名と同行の先生４名がいたが、別行動であり、実質的には６名の参加メンバーに植木校長・コーチ数名という贅沢なツアーとなった（GW 前半の同ツアーは、２０名が参加したと聞くが)。

大学時代に保田リーダーのスキーＰＷで、シールを付けて登ったことはあったが、カカトの上がるビンヂングを付けた山スキー（レンタルで借りた）を付けて山を登り滑るのは初めてで、どうなることかと不安であった。しかし、天候とメンバー、そして何より植木校長の人柄のお陰で、予想以上に楽しいスキーツアーとなった。

初日の笹ヶ峰牧場から黒沢池ヒュッテまでのシール登行は、それは散々なものだった。何しろ実質初体験のシール登山、シロウトは私一人で、いつの間にか遅れる。林の中をジグザグに斜行しながら登るのだが、ターン時に足を滑らせ、急な斜面でズレ落ちて転ぶなど、思うように行かない。植木校長の長男氏には、息が切れ足が止まると「休むでない、少しずつでも足を前に」と怒鳴られ、ワンゲル新トレ以来４２年振りに、きついシゴキを受けている気分だった。

ただし、我輩の情けなさにしびれを切らした長男氏は、私のザックを取り上げて、身軽になってからは、シール登行の要領が解りだし、何とかヒュッテまで辿り着く事ができたのだった

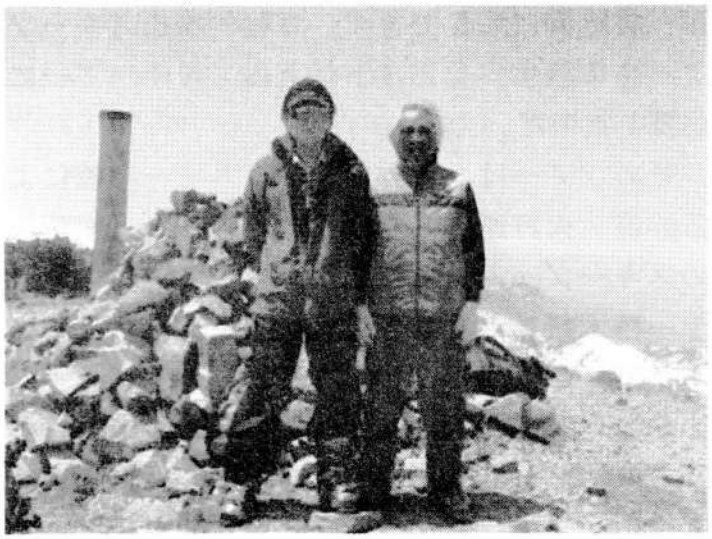
火打山からの大滑降、滑り降りてから仲間を撮る



滑り降りた黒沢岳。左のシュプールが我々の着けたものだ

（ザックを他人に担いで貰うという屈辱を受け入れた結果で）。黒沢池ヒュテは、お碗を伏せたようなドーム型の特徴あるヒュッテである。植木校長がオーナーで、２年前の夏に泊まった時の宿帳から、ツアーのパンフレットが届き、このツアーに参加したのである。

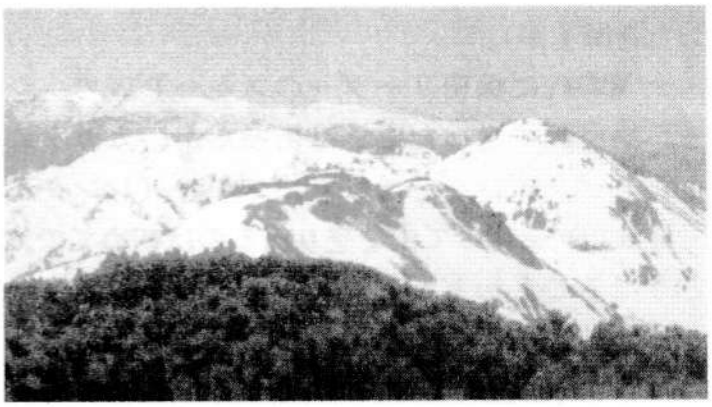
初体験のシール登行で、両足とも棒のようになっていたが、同行のどんぐりスキークラブの人達と酒を飲みながら語り合えた事が、疲れを癒してくれた。６４歳の最年長者は、山スキーを始めて３年目、スキーを始めて５年目と言う。その他のメンバーも全員が５０代で、スキーと山登りが大好き人間であり、すぐに皆と打ち解け、楽しく語り合えたのであった。



火打山山頂で、植木毅校長とのワンショット

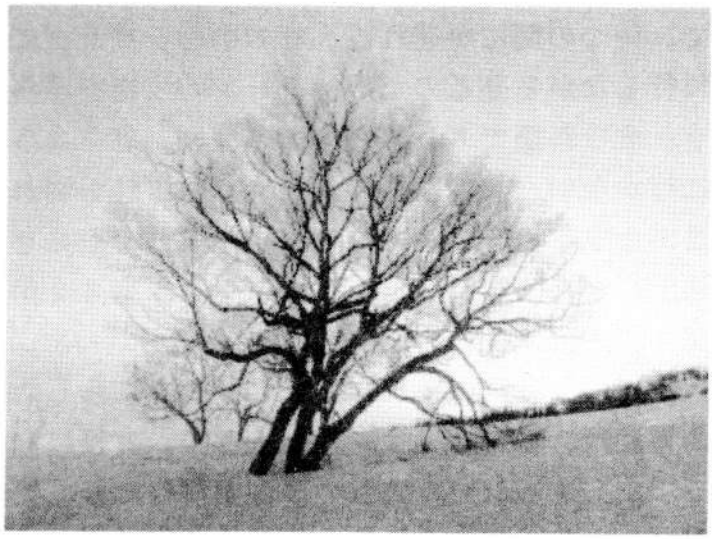
そして、夕食後は、同志社高校の先生方を交えて、植木校長を囲んで、またまたお酒を飲みながらの歓談会となったが、これがまた楽しいものであった。

植木毅校長は、今年７１歳。日本のプロスキーヤー第１号、穂高滝谷の初滑降や、モンブラン北壁の滑降、そしてアラスカ・マッキンレーの世界初滑降などの記録を持つ、三浦雄一郎とと共に、日本のスキー界をリードして来た冒険スキーヤーである。その方が、目の前で、モンブラン滑降やマッキンレー大滑降の体験を、まったく気さくに偉ぶらず話してくれるのである。これは、また応えられない幸せであった。



火打山山頂からは、北アルプスの白馬連峰が美しい

さて、本番のツアースキーは、３日間とも植木校長が登り下りとも先導された。まったくアドバイスを受けることは無かったのだが、名人の後ろを歩き、滑るのであるから、その行動そのものが良き見本である。体格は私より小柄であるが、大きく見える。シールを着けての登りは、ユックリとしたペースで全くペースが乱れない。ワンピッチが１時間、私は３０分もすると息が上がってくるが、植木校長は全く平気で登られる。スキー滑降でも、校長のすぐ後につ



快晴の黒沢池ヒュッテからの朝焼け

いて滑った。カービングターンにとらわれない植木流、急斜面でも余分な力を掛けずに、自然体で斜面を滑る。なによりリズムが素晴らしい。

今まで、自己流で滑った時は、オフピステの急斜面では、怖さもあって体が固まり、思ったようにターンを描けなかった。それが、名人の後について滑るだけで、自在に滑れるのであるから不思議である。雪は柔らかかったが、沈みこむことも無く滑り易い雪であった。

火打山の頂上からは、見事な一枚バーンである。山スキーのためにできたような斜面を躊躇せずに名人の後ろについて滑ると、我ながら感心するほどに綺麗なターンを描いてアッと言うまに滑り降りてしまった。

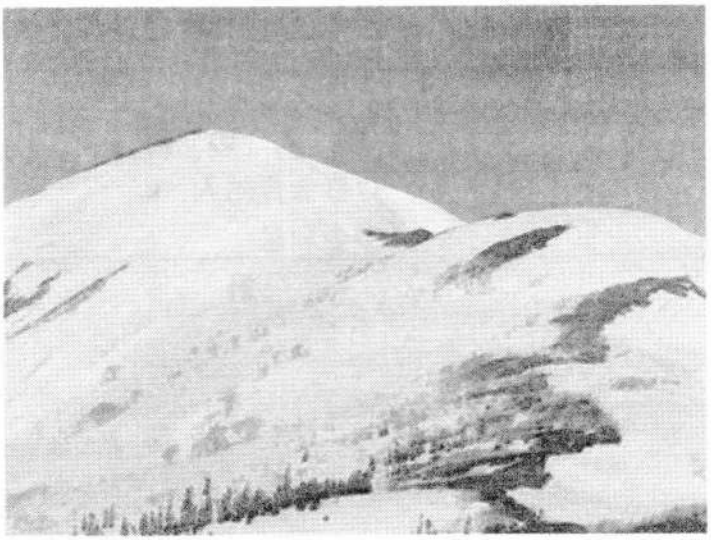
山スキーでは、３時間掛けて登って、滑りは１０分にも満たない。全く不経済なプレーだ。

天気が最高で、スキーヤーも少なく、白く輝く広大な雪面を一人占めして、自由にトレースとターンのラインを描く。この快感は、他に比べようが無い。滑り降りて、自分が描いたシュプールを確認し、一息付く時の満足感を、何と表現出来ようか。

私の４０年を越えるスキーシーンで、殆ど最高の喜びを与えてくれたスキーであった。

この７月に、３９年のサラリーマン生活に一区切りを付けることを決めている。あと何年生きることが出来るかは神のみぞ知るであるが、私には山とスキーと二つの生涯を掛けて楽しめる趣味がある。このきっかけを与えてくれたＫＵＷＶには大感謝だ。特にスキーは道具の進歩もあって、次々に新しい発見があり、その世界が拓けて行く。来シーズンから土日・連休にとらわれずにスキーが出来るのだからたまらない。

まさに、定年万歳である。ゲレンデでのカービングターン追求、オフピステのパウダーラン、山スキーに海外スキーツアー。楽しみ方は、限りない。スキー万万歳である。



最終日、黒沢岳の前での記念写真